

「西南学院」とは何だったのか

－創立期の「西南学院」のあり方をめぐって－

安部 健一

《はじめに》

以前、「西南学院初代院長 條猪之彦の事蹟」（「西南学院アーカイヴズ」Vol.1 2022）を執筆した際に、創立期の西南学院に関して、改めて私自身の誤解が明らかになり、また、新たな疑問点も浮かび上がってきた。そこで、いずれかの機会に、その誤解や疑問点を整理しなければならないと思っていたところ、昨年（2024）3月、日頃からお世話になっている学院事務局社会連携課の職員の方々にお話をさせていただく機会が与えられた。そこで、その機会を利用して、改めて問題点を整理してみることとした。本稿は、その時の資料を基に、加筆修正の上まとめたものである。

なお、文中で『西南学院七十年史』（1986）および『西南学院百年史』（2019）を度々引用するが、それぞれ『七十年史』『百年史』と略称することをお断りしておく。

1. 「西南学院」の募集広告に見る創立期の「西南学院」

我々は、「西南学院」の創立に関し、「旧制男子中学校として創立された」と理解し、また広報や学校の紹介をする場合にもそのように説明をしてきた。ところが、当時の新聞に掲載された募集広告を見てみると、どこにも「中学」とは書かれていないのである。具体的に確認するために、創立直前の二つの新聞広告を見てみたい。

（A）1916（大正5）年3月3日付「福岡日日新聞」広告（傍線は筆者）¹

（A）1916（大正5）年3月3日付「福岡日日新聞」
（傍線は筆者）

(B) 1916 (大正 5) 年 4 月 6 日付「福岡日日新聞」広告 (傍線は筆者)

以下、いくつかの問題点を列挙してみることにする。

(A) 3 月 3 日付「福岡日日新聞」について

①願書提出期間が、入学試験直前の 4 月 3 日迄であるということ。

現在では、入学試験の直前まで生徒募集が行われるなど考えられないが、創立当時としては、やむを得ないことだったのであろう。当時の「西南学院」の置かれた状況を象徴するものである。

②試験期日が 3 日間も設けられていたこと。

試験そのものは、国語と算術の 2 科目だけであるから、3 日間連続の試験が行われたとは考えにくい。とすると、たとえば遠方からの受験者などを考慮して、いずれかの 1 日を選んで受験できたのかもしれない。ただ、そうなると、試験問題が複数作られていたのかもしれないが、今のところ、それ以上は不明である。

③学院が「中学」ではなく、「中学程度」の学校と書かれていること。

④「私立」という冠称が付けられていること。

この 2 つの点が、創立当時の「西南学院」のあり方を最も象徴的に示していると考えられるので、詳しくは後述する。

(B) 4 月 6 日付「福岡日日新聞」について

① 15 人の補欠生徒が募集されていること。

立私

西南学院

福岡市

補欠生徒約十五名募集
志願者は来る八日午前までに申込みあるべし
八日午後試験の上入學を許可す但満十五歳以下

(B) 1916 (大正 5) 年 4 月 6 日付「福岡日日新聞」(傍線は筆者)

1 本稿で引用する「福岡日日新聞」と「九州日報」について

「福岡日日新聞」は、1878 (明治 11) 年その前身となった「筑紫新聞」の廃刊を受けて同年「めざまし新聞」として創刊された。1879 年「筑紫新報」に改題。1880 年「福岡日日新聞」に改題。1942 (昭和 17) 年新聞合同により「九州日報」と合併、「西日本新聞」となった。

「九州日報」は、1887 (明治 20) 年玄洋社系の「福陵新報」として創刊された。1898 (明治 31) 年「九州日報」に改題。1942 (昭和 17) 年新聞合同により「福岡日日新聞」と合併、「西日本新聞」となった。

4月6日は、最初の試験期日の最終日である。その日に15人もの補欠生徒を募集するということに、当時の厳しい状況が反映されていると言える。

②募集年齢が引き上げられていること

募集年齢の引き上げも、生徒募集のための苦肉の策であろうが、これも同じく学院の置かれた厳しい状況を反映するものである。『七十年史』上巻283～284頁に掲載された原田種夫氏（1901～1989 小説家 西日本文化賞受賞 西南学院中学部第1回卒業生）の文章「懐かしい母校」によれば、氏も「満十五才」で入学したようである。ひょっとしたら、受験年齢引き上げの要望なども寄せられていたのかもしれない。

2. 当時の新聞に見る西南学院の創立

ある程度は仕方のないことかもしれないが、我々は、現代の視点や価値観で過去の事件を見てしまう。もちろんそれは一概に悪いこととは言えないのかもしれないが、現代と過去との違いを、「善悪」を基準としてとらえ始めると、冷静で客観的な判断ができなくなってしまうという陥穽にはまり込んでしまう。ここでは、西南学院創立に関する新聞記事によって、創立当時の西南学院の姿と学院を取り巻く状況を、現代感覚による（「善悪」を基準とした）価値判断を避けながら、確認してみたい。

- (1) 1916（大正5）年2月23日付「九州日報」（原文縦書き、正漢字旧仮名、句読点無し、漢字にはルビ、傍線太字は筆者、以下に注釈を付す。）

●西南学院開設

中学程度四月新学期開始

福岡市並びに接近四郡に対しては、中学教育機関として唯一の修猷館を有するのみにて、入学志願者数に対し収容率極めて低く、非常の困難を感じつつある折柄、他中学数校にては大正五年度より増員することと為りしも、中学修猷館のみは最早増員の余地無く、止むを得ず中学一校増設の計画無きに非ざるも、実現は果たして何年後なるべきか予測し難きものありしに、今般バプテスト教宣教師福岡市大名町居住米国人ドウジャー氏の出願に係る西南学院は、去る十五日付を以て谷口福岡県知事の建設認可を経たるを以て、愈来四月より新学期を開始し中学部第一学年三学級一〇五名を募集する筈なり。同院の特色は教育勅語の趣旨を奉戴し、基督教主義に依りて中学程度の教育を施し、忠良有為の帝国臣民を養成せん事を期する者にて、兩三年中には更に校舎をも新築して文部大臣の認定を経るの計画中なるが、院長は、京大理学士條猪之彦氏不日赴任の筈にて、氏は是迄熊本県玉名中学校教頭を奉職せし人なり。尚他に職員八名も既に確定し、英語科はドウジャー氏及川勝教諭等担当する由にて必ず特徴を有する事なるべし。而して同院

の開設はジャドソン記念事業の一にて嚮に三年間を期し米国に於て二百五十万円を醸集し、伝道教育の二事業に充当する筈なりしに、戦乱勃発の爲め一年を延べ、本年五月一日迄に予定の募集を終え、其内我国教育事業の爲めに東京神学校に六万円、新設熊本高等女学校に一万五千元、本院に六万円を支出する筈にて之に大名町に於ける教会所有の地所家屋見積価格五万八千円を加えて新築費用に充て、経常費としては、大正五年中に四八四〇円、六年には七六〇〇円、七年以後は必要に応じて一万円宛送付を受くる筈なれば、教育界に対し貢献する所尠少ならざるべしと

◎中学程度 中学程度の教育 文部大臣の認定を経るの計画中 前項で見たのと同じく創立当時の「西南学院」は、「中学程度」の学校で「中学程度の教育」を施すが「文部大臣の認定」は受けていないつまり、正式の「中学」ではなかった—ということである。詳しくは後述する。

◎中学一校増設の計画 福岡地区二番目の「公立中学」として1917（大正6）年修猷館内に「福岡中学」が創立される。

◎教育勅語の趣旨を奉戴し 1890（明治23）年発表。国民道德の絶対的基準、教育活動の最高原理と位置付けられたが、1948（昭和23）年6月の国会で正式に失効。戦前の「正規の学校」において「教育勅語」を「奉戴」することは当然のことであって、「奉戴しない」自由などありえなかった。

◎教頭 『七十年史』上巻の275頁にも、「…同校の教頭であった條は…」などと書かれているが、そのような事実はなかったようである。新聞記事も含めて、なぜそのような「誤解」が生じたのかは分からないが『西南学院百年史』では、「教頭」は削除され、単に「教諭」と書かれている。

◎ジャドソン記念事業 「ジャドソン（アドナイラム・ジャドソン）」のビルマ（ミャンマー）宣教100年を記念して1912年に開始された募金活動。「The Jadsen Centennial Movement」、3年以内に125万ドルを調達し、25万ドルは病院やチャペルの建設、20万ドルは出版事業、そして80万ドルが「外国にあるミッションスクールの建設」に使われる予定であった。

◎戦乱勃発の爲め一年を延べ 「戦乱」は言うまでもなく「第一次世界大戦」（1914.7～1918.11）のこと。アメリカや日本は、参戦しながら戦場とはならなかったがために、物資の補給基地としての役割が与えられ、開戦当初こそ深刻な不況に見舞われたというが、その後（日本では開戦1年後の1915年後半から）は好況に転じ、空前の好景気がもたらされた。日本ではこの好景気は「大正バブル」や「大戦景気」

と呼ばれ、全国的にいわゆる「成金」が生まれたが、福岡でも中村定三郎、精七郎兄弟などの有名な「船成金」が生まれた。（この中村兄弟の資金によって始められたのが、西南学院創立の年に開始された「博多湾大築港（杉山築港）事業」である。）

『七十年史』上巻の232頁には、「この募金運動は、…第一次世界大戦が勃発したため、予定通りには進捗しなかったようである。」としか書かれておらず、好景気のことについては一切触れられていないので、あたかも戦争の影響で、募金活動が進まなかったような印象を与えて終わっている。また同じく288頁でも「…世界大戦勃発等による米国経済界の不況のため、ミッション・ボードからの支援が思わしくない状況にあったため、ドージャー院長の悩みは大きかった。…」などと書かれている。が、果たしてそうであろうか。前述のとおり、開戦当初の不況の時期に募金活動が滞るのは納得できるが、その後の好景気の時期には、当然、募金活動も大いに進展したに違いないと考えられる。アメリカの好景気は日本よりも早く始まっていると考えられ、それによってもたらされた資金もかなり募金にまわったのではないか。だからこそ、戦争勃発半年後の1915（大正4）年1月に米国南部バプテスト外国伝道局から男子中学校開設が承認されたのではないか。そう考えると、『『西南学院』は戦争によってもたらされた好景気によって誕生した学校（戦争によって生まれた学校）」ということになるのではないか。悲しいけれども私はそう考えている。

◎新設熊本高等女学校 1916年時点で「新設」とある以上、熊本県立の「高等女学校」（1903年創立、現県立第一高等学校）ではありえない。これは、当初、熊本に建設が予定されていた「バプテストの女学校」すなわち後の1922年に小倉で創立される「西南女学院」のことであると思われる。

(2) 1916（大正5）年4月12日付「九州日報」（原文縦書、正漢字旧仮名、句読点無し、漢字にはルビ、傍線太字は筆者、以下に注釈を付す。）

●西南学院開院式 福岡市大名町米国人シーケー・ドージャー氏の設立に係る私立中学西南学院にては昨日午前10時より同院内新築講堂に於いて開院式を挙行、職員生徒並びに來賓父兄等一同着席するや「君が代」の唱歌あり。主事ドージャー氏 聖書箴言中の一節を朗読し、バプテスト教会下瀬牧師の祈祷、院長條理学士の式辞あり。県知事代理久保学務課長左の祝詞を朗読す。

私立西南学院本日をとし茲に開校の盛典を挙ぐ。思うに近時文運の進歩は益々教育の必要を促し、之が機関の増設を要求す。就中中等教育に於て最も切なる者あり。此の秋に方り本院の開設を見、中学校に準じて高等普通の教育を為さんとす

るは本官の深く欣幸とする所なり。冀くば当事者夙夜厲勉克く其の実績を挙げ、益々基礎を鞏固ならしめて本校設立の趣旨を貫徹し邦家の○○に貢献する所あらんことを

福岡県知事従四位勲三等

谷口留五郎

次に井手市長、理事会代表尾崎源六氏、西南部会総代佐藤喜太郎氏及福岡牧師会総代北古賀吉太郎氏等の祝辞ありて十一時半閉式せり。来賓は河内旅団長、久保理事官、永島県視学、根岸、藤川、太田、中村、釜瀬等各中等学校長、伊東図書館長、各教会牧師、在留米国人其他父兄等百数十名なりき。因に試験の上採用せし生徒は百四名。

◎開院式 「福岡日日新聞」の記事も「開院式」となっているが『七十年史』では「開校式」と書かれている。

◎私立中学西南学院 ここでは「私立中学」と書かれているが、後述の通り、「正規の中学校」としては発足していない。

◎下瀬牧師 下瀬加守(1876～1955)。この時は福岡バプテスト教会牧師。赤煉瓦チャペルに掲げられていた「西南よ基督に忠実なれ」の文字を揮毫。

◎中学校に準じて 正しく「中学校ではない」ことを表した言葉である。後述する。

◎谷口留五郎(1867～1942) 現在の奈良県の出身。帝国大学(現東京大学)卒業後、内務官僚となる。徳島、岡山、鹿児島各県知事を歴任。鹿児島在任中は、桜島大正大爆発(1914)に遭遇、その復興に尽力。その後、1914(大正3)年から1919(大正8)年まで福岡県知事。

◎井手市長 井手佐三郎(1862～1921)現在の朝倉市出身。慶應義塾卒業後、時事新報社勤務。その後、教員に転身、茨城県中学校校長、岐阜県視学官などを歴任。1914(大正3)年～1918(大正7)年まで福岡市長。

◎尾崎源六(1867～1934) 若松、門司、下関、呉、長崎など諸教会の牧師を歴任。その間バプテスト連盟西南部会議長、西南学院理事、理事長に就任。長く西南学院で教鞭をとられた尾崎圭一先生(神学部)、恵子先生(児童教育学科)の厳父。

◎西南部会 1903(明治36)年、福岡、熊本など九州山口の九つのバプテスト教会によって組織された「浸礼派西南部会」。1918(大正7)年改組され「日本バプテスト西部組合」となる。

◎佐藤喜太郎(1860～1923) 福岡バプテスト神学校、日本バプテスト神学校、小石川バプテスト講義所教授。

- ◎北古賀吉太郎（?～?）不詳。日本基督教会伝道師から日本福音ルーテル教会牧師。
 - ◎旅団 旧軍制度における編成単位。主に二個連隊で一旅団を構成する。福岡の旅団司令部は城内（赤坂門側）におかれ、この時は第35旅団として歩兵第24連隊（福岡）と歩兵第14連隊（小倉）を隷下に置いていたと思われる。
 - ◎理事官 公務員（県?）の官職。
 - ◎県視学 県の教育行政の指導監督官。
 - ◎藤川 藤川勝丸（1872～1951）第2代福岡工業学校校長。福岡中部教会会員。長男泰氏は西南学院入学志願者第1号。
 - ◎釜瀬 釜瀬新平（1867～1930）九州高等女学校（現若葉高校）創立者。私立学校の地位向上に尽力した。
 - ◎伊東図書館長 伊東尾四郎（1869～1949）。帝国大学卒業後、小倉中学校校長などを経て福岡図書館長に就任、郷土資料の充実に尽力した。
- ※なお、佐藤喜太郎氏の生没年、北古賀吉太郎氏の経歴、藤川勝丸氏の生没年に関しては、須藤伊知郎先生（大学神学部教授）からご教示いただいた。

（3）1916（大正5）年4月12日付「福岡日日新聞」（原文縦書、正漢字、旧仮名、句読点無し、漢字にはルビ、傍線太字は筆者、以下に注釈を付す。）

●西南学院開院式 新設私立福岡市大名町西南学院開院式は十一日午前十時より挙行、職員生徒来賓一同着席の後「君が代」唱歌合唱、同学院設立者シー、ケー、ドージャー氏聖書朗読、牧師祈祷條院長式辞、久保理事官代読、井手市長演説、理事会、浸礼教会、西南部会、福岡市内牧師会各代表者等祝辞及各地祝電祝辞披露ありて閉式

◎久保理事官 「九州日報」では「県学務課長」となっていた。

2. 正規の「中学校」ではなかった!? 創立当時の「西南学院」

（1）「西南学院」に関する思い込み

『百年史』にも、はっきり「青年たちに知的・精神的教育を施すことを使命とする男子中学校」（通史編47～48頁）や「生徒104人の男子中学校として発足」（同49頁）と書かれており、通史編に付けられた年表にも、「福岡県知事より男子中学校設立認可」（同714頁）と書かれているが、筆者も、学院は「男子中学校として発足した」と固く思い込んでいたので、前述の「募集要項」や「開院式」の新聞記事（「両三年中には…文部大臣の認可を経る予定」「中学程度」「中学校に準じて」等）も、何気なく見過ごしてきたところであった。しかし、『西南学院七十年史』などで、創立当時の学院のあり方について、改めて確認してみたところ、実は、ここに重大な問題があるこ

とに気付かされたのである。『七十年史』の記者も、そのこと、つまり「西南学院は、創立時点では、正規の『中学校』ではないこと」に気付いていたからであろうが、あくまで「私立 西南学院」としていて、決して「中学校」とは表現していないのである。

これに対して、例えば、県立中学校の「修猷館」などは、1889（明治22）年、最初から「県立の尋常中学として」（「修猷館二百年史」）発足している²。また、西南学院から1年遅れて設立された「県立福岡中学校」も、最初から「中学校」である。西南学院が、「私立中学西南学院」を名乗るのは、その理由は不明であるが、創立の年の11月である。ただ、これもあくまで「私立中学」であり、「私立」の冠称が外れて「中学西南学院」に改称するのは、文部省により、上級学校（旧制専門学校）への入学資格が与えられた、1920（大正9）年のことである。ひとつ考えられるのは、当時は「呼称」にあまりこだわってなかったのかもしれないということである。学院にも社会にも「いずれは正規の『中学校』になるのだから、『私立中学』と名乗ってもかまわないだろう」という程度の思いが共有されていたのかもしれない。

（2）正規の「中学校」の要件

「西南学院」の設立は、1916（大正5）年の2月15日、時の県知事谷口留五郎によって認可されている。ただ、それは『百年史』が言うような「福岡県知事より男子中学校校設立認可」ではなく、あくまで「中学校に準じて」、「中学程度」の教育を施す「私立 西南学院」としての「設立認可」であり、直ちに「公立中学校」と同等に見なされ、同等の資格が与えられたわけではないのである。おそらく、現代と百年以上前とは、教育法規や学校の在り方が異なっているために、現代では問題点を認識できずに見過ごされてしまっているのだろうが、当時の「公立中学校」と「私立中学校」とでは、大きな違いがあったのである。この「違い」を認識しない限り、ドージャー先生をはじめ創立に関わった人々の苦労を理解することはできないであろう。従って、過去の問題を「反省」するも何もないのである。

学校教育や教育法規が整備され、設立の認可が、「公立」であれ「私立」であれ、同時に「中学」なら「中学」としての、「高校」なら「高校」としての「要件」を満

2 1886（明治19）年に公布された「第1次中学校令」では、「中学校」が「高等中学校」と「尋常中学校」とに分けられていた。「高等中学校」は「第1次高等学校令」（1894）によって「（旧制）高等学校」となり、「尋常中学校」は「第2次中学校令」（1899）によって「中学校」と改称される。なお、「修猷館」は、1885（明治18）年に3年制の英語専修の「専門学校」である「福岡県立英語専修修猷館」として再興された後、「福岡県立尋常中学修猷館」として再発足した。

たす現代と違い、百年以上前は、特に「私立学校」の場合は、学校の創立と、その正規の学校としての「要件」の充足とは別であり、「公立学校」と同等の「要件」の充足まで数年を要したようである。

それでは「正規の『中学校』の要件」とは何か。現代では、最も基本的なことは、中学校の「関係法規」に基づき「安定した財政基盤」と「校舎や運動場などの教育環境」を整備し、その上で「中学校課程」の教育を施し、その学業を認定すること等であろう。しかし、当時は、「関係法規」も、「公立」の場合は「中学校令」の条件を満たすだけで学校の設立が認められたが、「私立」の場合は、さらに「私立学校令」の条件を満たす必要があり、しかも「公立」には最初から与えられている「学校の社会的信用度をはかる上での重要な要素（『七十年史』）」であったという「徴兵令第十三条」（入営延期の資格）並びに「文官任用令第六条」（正規の官吏として任用される資格）の認定、そして上級学校である「（旧制）専門学校への入学資格」の認定等の「特典」が与えられておらず、「西南学院」の場合は、「徴兵令」と「文官任用」の特典が、創立3年目の1919（大正8）年4月14日、「（旧制）専門学校への入学資格」の認定が創立4年目の1920（大正9）年3月29日のことであった。

『七十年史』には、「学院は、中学校開設満四年で、兵役・就職・進学の中で、正規の中学校として認定されることになった。」（上巻 301 頁、傍線筆者）と書かれているが、これらの公認資格の認定に関し、3 頁以上の紙数を費やして説明されており、『七十年史』編纂当時（1986 年）までは、創立当時の人々の「苦勞」が伝承（共有）されていたことを物語ると同時に、「正規の中学校として認定された」ことに対する当時の人々の喜びも伝わってくるようである。なお、『百年史』では、これらの資格の認定に関しては、コラム「宗教教育を禁じた『文部省訓令第十二号』」の中で簡単に触れるだけにとどまっている。これも、現代において、創立当時の苦勞や重みを理解することの難しさを物語っていると思われる。

（3）「私立西南学院」の意味するもの―「私立」学校に対する「抑圧（差別）」

現代では「私立」という言葉にそれほど悪いイメージはないであろう。いや、場合によっては、いわゆる「お受験」（地元以外の小・中受験）などの場合には、明らかに良いイメージで語られていると思われる。筆者自身も、西南中入学以来、職場に至るまで、一貫して「私立学校」で過ごしてきたこともあり、「私立」という言葉に一種の「誇り」さえ感じて過ごしてきた。従って、県知事による「設立認可書」にはじまり、新聞広告等にも、敢えて「私立」の冠称が付けられていることに対して、疑問を感じるどころか、「お洒落」なイメージでとらえていた。また、学院創立から数年

の間に、校名が「私立西南学院」（1916.2）「私立中学西南学院」（1916.11）「中学西南学院」（1920.7）と変わり、最後に「私立」の冠称が外れたことに対しては、逆に疑問を感じたほどである。

『七十年史』によると、そもそも「私立」という冠称は、「文部省令第11号」（1901〈明治34〉）によって義務付けられたものであったという。前述のように、「正規」の学校である「公立学校」との違いを明確化させるための「抑圧（差別）的」政策だったと思われるが、その思惑通り、当時の私立学校関係者（教職員、生徒）には、劣等感を感じさせるものであったようである。先に引用した原田種夫氏の文章「懐かしい母校」には

「…学校が『私立』ということが、ひどい劣等感を持たせたのである。…『私立』を軽蔑するのは、そのころの風潮だったかも知れない。…二年・三年とたつ内に、いつしか私立という観念もなくなり、劣等感など消えてしまい、学生生活が楽しいものになった。何よりも嬉しかったのは、白砂青松の中で、清浄な空気を吸って勉強できたことであつた。…」

と書かれており、現代とは違う、当時の「私立」学校の置かれた厳しい立場を象徴的に物語っている。「差別は作られるものである」とは、よく言われることであるが、それは、昔の「私立学校」にも当てはまることだったのである。

その「私立」の冠称の義務が1919（大正8）年文部省訓令第24号によって廃止されたことによって、前述のように西南学院も「私立中学西南学院」から「中学西南学院」へと改称するわけだが、その背景には、差別的待遇からの脱却という当時の関係者の切実な願いも込められているのであった。

価値観や学校の在り方そのものが違う現代では、このような学院の先輩方の御苦労は分かりにくくなっているが、社会的評価を高めるために努力された学院関係者（教職員、生徒、保護者）のことは、忘れてはならないのである。

3. 西南学院創立当時の社会状況

「西南学院初代院長 條猪之彦の事蹟」を執筆した際に、「付記」として『『西南学院百年史』における時代区分と歴史認識』という一文を添えさせていただいた。「時代区分」は、その歴史認識の「基本」であるが、それが『百年史』においては、いくら西南学院創立の年とは言え、第一次世界大戦中の1916年を境として区切られている上に、『百年史』は、その時代を象徴する出来事について、「世相の暗黒面を強調するものばかりが並べられ、学院が、あたかも暗い時代の中で誕生したような印象を与えている」（「付記」）ことに強い違和感を覚え、敢えて書かせていただいたのであった。

学院が、決して暗黒の時代に誕生したものではないことは、創立前後の社会象を

確認すれば、分かることである。

そこで、1915年から17年にかけての、福岡市における主な社会事象を見てみることにしたい。昭和に刊行された「福岡市史第二巻大正編」（1963 福岡市）の「附録年表」から、客観的に重要事項と思われるものを抜粋して提示する。なお、括弧内は筆者による注釈である。

1915（大正4）年

- 4月 新築福岡県庁開庁式（1年後の陸軍特別大演習では天皇行在所として使用）^{あんどいしよ}
- 9月 筑紫電気軌道株式会社（現西鉄天神大牟田線）創立総会

1916（大正5）年

- 2月15日 西南学院設立認可
- 4月11日 西南学院開院式（大名町）
- 6月17日 市政刷新会騒擾事件（上水道敷設の遅れ、他）、博多毎日新聞社襲撃事件（部落差別）³
- 6月 筑前参宮鉄道（吉塚－筑前勝田、後の国鉄勝田線。1985年廃止）創立
- 8月 博多湾築港株式会社創立総会（いわゆる「杉山築港」）⁴
- 11月11日～16日 「陸軍特別大演習」挙行 天皇以下文武百官福岡に集結⁵
- 12日 市内外小学校男子生徒による提灯行列催行
- 15日 90歳以上の高齢者13人に御菓子料下賜

1917（大正6）年

- 1月 福岡市上水道工事開始（曲渕水源地）
- 2月15日 県立福岡中学校（現福岡高校）設立認可
- 4月1日 県立福岡中学校開校（仮校舎－修猷館寄宿舎の一部）
- 6月 博多湾築港起工

3 「市政刷新会騒擾事件」と「博多毎日新聞社襲撃事件」について
いずれも1916年6月17日に発生した騒擾事件。「市政刷新会」とは、福岡市における上水道敷設の遅延と当時の井手佐三郎市長（1914～1918まで在任）の施政および政友会系議員の活動に不満を持つ、民政党系議員によって結成された院外団ともいべき団体。第一回目の市民大会を明治座（東中洲）で、第二回目の市民大会を九州劇場（同）で開催したが、第二回目の市民大会には3,500人も群衆が参加、氣勢を上げた後、政友会系議員の自宅に押し掛けた。ちょうど同じ日に、東中洲から程近い土居町にあった「博多毎日新聞社」が、その被差別部落に関する記事を見て激怒した民衆に襲撃されたのが、「博多毎日新聞社襲撃事件」である。この二つの事件の群衆が、たまたま明治通りで合流したことで、現場は大混乱となり、その検挙者は600人にも上った。「博多毎日新聞社襲撃事件」は、福岡の部落解放史でも必ず触れられる問題であるが、記事の内容やその後の処理の問題を含めて、今なお検証すべき課題が残されている事件である。

10月 九州電気鉄道（後の九州電力、西日本鉄道）本社完成（現在の天神ビルの場所）

12月 西南学院新校舎完成（西新町、翌1月に移転）

これらの社会事象を一瞥しただけで、当時の福岡市の盛り上がりや発展ぶりが確認できると思う。学院の創立前後は、県庁をはじめ、鉄道、港湾、上水道などの社会資本が次々に整備をされた時代である。これだけ盛んにインフラの整備が行われる時代が、『百年史』が説くような、不景気で暗黒の時代であるわけがない。特に、学院創立の1916年の11月には、「陸軍特別大演習」が、福岡平野一帯をその会場として行われているが、これこそ当時の雰囲気象徴的に表すものとも言える。断っておくが、もちろんここで軍隊を賛美するわけではない。ただ、当時における「陸軍特別大演習」とは、「国内最大級の国家的行事」であったということは強調しておきたい。何しろ、天皇以下、文武百官が福岡に大移動して行われた「祭典」である。地元福岡の盛り上がりぶりは、当時の新聞を見れば容易に想像できる⁵。

西南学院は、前述のように、第一次世界大戦による好景気とこのような地元の盛り上がり方を背景として誕生した学校なのである。

4 「博多湾築港株式会社」と「博多湾大築港事業（杉山築港）」について

「博多湾築港株式会社」は、前述の「博多湾大築港事業（杉山築港）」を実現するために設立された会社。そもそも、「博多湾大築港事業」は、博多商人の要請を受けた杉山茂丸（1864～1935 明治から昭和にかけて政財界で活躍し、多くの事業を成立させた。作家の夢野久作の父。）によって計画された築港計画である。具体的には、箱崎と志賀島を結ぶ線の東側170万平米を櫛の波状に埋め立てて一大港湾地帯を造成するというもので、その構想は、福岡市内電車、福岡筑豊連絡鉄道（現在の福北ゆたか線の原型）、関門海底トンネルなどと連動させた壮大なものであり、またそれを民間事業で行おうというのだから、まさに前代未聞の大計画であった。ただ、着工はしたものの、第一次世界大戦後の不況の影響を受けて資金繰りに行き詰まり、紆余曲折はあったが、事業は福岡市に引き継がれ、会社は解散する。現在の千鳥橋から箱崎浜にかけての一带が、当時の「博多湾築港」によって造成された名残りである。

5 「陸軍特別大演習」について

陸軍創設以来15回目のものとなった福岡での「陸軍特別大演習」は、福岡平野（現在の糟屋郡から福岡空港一帯にかけての農地）をその演習場とし、第五（広島）第六（熊本）第十二（小倉）第十八（久留米）の四個師団計10万人が参加、南軍と北軍に分かれて演習を行った。期間は11月11日から16日までの6日間で最後に天皇による観兵式を以て演習を終了した。天皇の行在所は、前年に完成したばかりの福岡県庁内に設けられ、皇族、総理大臣ほか文武百官の宿舎には、旅館はもちろん、筑豊炭鉱主をはじめとする富豪たちの邸宅が充てられた。また、兵士17,000人が、福岡市内の民家に宿泊（民泊）した。また、この時の演習には、日本初の飛行場である「所沢飛行場」に所属する「飛行機」16機が初めて参加し、大きな話題となった。期間中、福岡市内は多くの観光客であふれかえり、鉄道、市内電車、旅館、料理屋、花柳界を含めて、大きな経済効果をもたらされたという。